

サビエル生誕五百年



ドン・キホーテの国

スペイン巡礼の旅もフランスからピレネー山脈を越えて北部・ナバラ州に入った前回とは違い、今回は空路で東部のバルセロナへ。さらにバレンシア、クエンカを経て首都マドリッドに入った。

マドリッドで二泊したあと南部アンダルシア地方に向かうバスは中部の広大なラ・マンチャ地方を走る。セルバンテスの小説「ドン・キホーテ」の舞台となった所である。

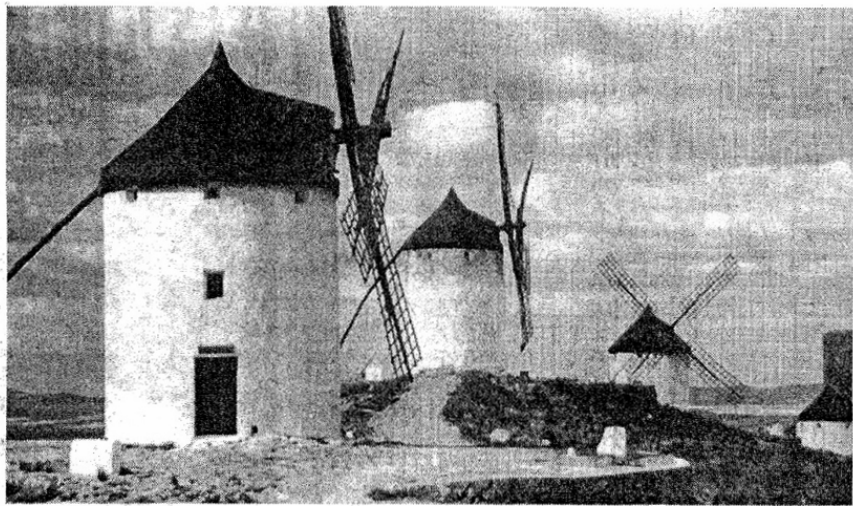
小学生のころに読んだこの物語の影響で、スペインといえばドン・キホーテを連想したものだった。そのころはスペインがカトリック国で、数々の巡礼地があることなど全く知らず、遠い遠い外国であった。

「ミュージカル」ラ・マンチャの男が忘れかけていたドン・キホーテを思い出させてくれた。作者のセルバンテスはこの小説の構想を刑務所の中で考えたという。どんな悪いことをして刑務所に入れられたかは知らない。

賢い妻にこの話をしたら「読者が増えるよいうな巡礼記を書くために、ちよつと刑務所に入れてもらったら?」。「オー・ゴッド」、何という言葉か。刑務所に入らなくても時間は十分にある。問題は能力なのである。サンチ

ヨ・パンサのような良き従者がいれば、もつと良い巡礼記は書けるのに。余談が長くなったが、大人になってスペインをより身近な国にしてくれたのはスペイン人宣教師である。サビエルゆかりの地である山口にはイエズス会地区本部もあり、たくさんのスペイン人宣教師が来日した。焼失したサビエル記念聖堂を建てたドメンザイン神父、結婚式を挙式してもらったイリサリ神父。今も活躍している徳山のオレギ神父、泉神父、光のアルティリョ神父と挙げればきりがな

私が洗礼を受けたのもこの人たちの存在があったからだ。山口に限らず外国人宣教師たちが日本の教育・医療・福祉などに果たした役割は実に大きい。「他者の為に生きる」ドン・キホーテのように良き従者とともに残された人生を彼らのように生きたいと思いつつ、あつとに。 (元山口放送取締役ラジオ局長)



ラ・マンチャ地方の風車=ガイドブックから



スペイン人シスターにもらったドン・キホーテの額